

第47回

人と大地に 魅せられて

北海道に移住して約10年。東京出身の私にとって、この地の暮らしは驚きの連続。
出会った人々、食や自然に魅了された数々の体験について取り上げます。
今回は、千歳や札幌からもほど近い長沼町に新しくできた「白銀荘」のスペースを紹介します。

白銀荘の小屋。冬季は休業中。春に本格オープン。詳しくはInstagramで。@hakuginsou

ハーブと文庫とギャラリーと。小さな空間に想いを閉じ込めて

香りの世界に惹き込まれ

雪が降り出した初冬の長沼町に白銀荘という名でハーブブレンドティやハーブソルトの販売を行う柴田翔太さんが小屋を建てた。六畳ほどの小さな空間には、季節の花や草木が大胆に生けられ、控えめにハーブの商品が販売されている。ショップというよりも白銀荘の世界観がギュッと凝縮されたスペースだった。

世界観が培われていくまでには長い道のりがあった。柴田さんは札幌出身。東京の高校に通いたいという想いが募り、家出同然で単身上京し、通信制の高校に通いながらアルバイトで暮らしをつないだ。アルバイトの一つは近畿大学の農地試験場。ここで農作業に従事し植物の世界の扉が開かれた。また、中国茶を扱う店の家族と知り合い、食事を共にしたり、お風呂を借りたりする中でお茶の香りに魅せられるようになった。

「植物、なかでもハーブは、いくらやっても興味がつきない世界だと思いました」

東京で大学に進学しつつコンサルティング会社で働いた。仕事は多忙を

東京都出身。美術の専門出版社で雑誌・書籍の編集に約20年携わり、2011年に北海道へ移住。

2018年に「森の出版社 ミチクル」設立。北の自然や人をテーマにした本を刊行している。イラストエッセイ『山を買う』など。



母屋の本屋は小鳩書房、ギャラリーはyokiと名付けられた。写真は木の板に宮沢賢治の詩が焼き付けられた作品。

極め、三年ほど勤めて体調を崩し、札幌へ戻ることを決めた。札幌では自動車の整備用の工具を販売する店で働いたり、カメラマンをしたり、デザイナーとしてHPを制作したり。花屋でも経験を積んだ。多彩な業種に関わったが、心にはハーブと香りを追求したいという固い決意があった。

「工具の使い方に詳しくなれば、家を建てる技術の習得にもつながるし、ハーブを扱うときに撮影やデザインも必要になると思っ、糧になる仕事を選んでいきました」

仕事の傍ら友人の畑でハーブ栽培も始め、二〇一四年にハーブブレンドティの販売をスタートさせた。翌年には札幌から長沼の古家に住まいを移した。その後、近隣の花農家で二年間研修をし、ハーブ栽培を本格的に行

える環境を整えた。同時に古家を少しずつ改修。敷地に小屋も建てた。

「最初、昨年春に小屋のオープンを考えていました。でも、この小屋だけでは、みなさんに満足してもらえないんじゃないかと思うようになって」

ギャラリーと本屋も生まれて

友人と話す中で母屋に本屋とギャラリーをつくる発想が浮かんだ。

「小鳩書房で扱うのは岩波少年文庫のみです。一九五〇年、発刊に寄せた文章に、この文庫が都市はもちろん、農村の隅々にまで普及する日が来てほしいという内容があつて、長沼の農村地帯にピッタリだと思いました」

『星の王子様』『ロビンソン・クルーソー』『モモ』など、いまなお読み継がれている名作があり、初版と新装版の両方が置かれている。ギャラリーでは、農民の暮らしに根差し創作活動を行った宮沢賢治の詩を木の板に焼き付け展示した。

「美しい木目の板に詩が書いてあつたらいいなあと以前から思っていて」長沼の薪屋「ワンモアウッド」を営む友人に、特徴のある木目の板を探

してもらい、一緒に展示をつくり上げた。焼き付けた詩は、百年前の関東大震災の前後に宮沢賢治の心に起きた変化とはどんなものだったのだろうか？という視点で選んだそう。

「本を広げたとき、ふと一九二三年九月前後の詩が目に入つて。日本では、東日本大震災や北海道胆振東部地震など多くの災害に遭つてきました。いまウクライナやガザで紛争が起きています。こうした時代に、『強く生きられる何か』を賢治の詩から見つけてもらえたらと考えました」

ギャラリーと本屋には、およそ百年前に使われていた古道具も並べられ時空をタイムスリップしたような空間となつていた。この場で賢治の詩や文庫を手にとるとき、それらの言葉が五感のすべてで捉えるような感覚が湧き起こった。さらに柴田さんが入れてくれたジャスミン茶を飲み、体全体に鮮烈な印象を感じた。花の香りがふつと鼻に抜けた後、透明感のある味わいが残った。

小屋と母屋のスペースは、どちらもこぢんまりとしているけれど、心の奥底にある何かと響き合う、特別な体験ができる場所だった。